

預かり保育に関する研究（3）

——通常保育と預かり保育中の子どもの発話——

児童学科 清水益治・菊野春雄・大橋岑吉

抄録：より望ましい預かり保育の形態を探るに当たり、子どもの発話を分析した。その発話は、TシャツにICレコーダーとマイクをとりつけて記録した。このようなTシャツを着て、3歳児1名と5歳児1名が幼稚園で通常保育と預かり保育を受けた。彼らの通常保育中と預かり保育中の発話を分析して、以下の結果を得た。すなわち、彼らは、通所保育中よりも預かり保育中の方が、先生や他の子どもと多くのやりとりをし、発話音節数も多いという結果を得た。これらの結果は、子どもの発話が、よりよい保育の尺度になる可能性を示唆し、保育に工学や技術を応用することに関連づけて議論された。

索引語：子どもの発話、預かり保育、保育の評価

預かり保育の定義

平成12年4月から施行された幼稚園教育要領の「第3章 指導計画作成上の留意事項2 特に留意する事項」の(6)には、「地域の実態や保護者の要請により、教育課程にかかる教育時間の終了後に希望する者を対象に行う教育活動については、適切な指導体制を整えるとともに、第1章に示す幼稚園教育の基本及び目標を踏まえ、また、教育課程に基づく活動との関連、幼児の心身の負担、家庭との緊密な連携などに配慮して実施すること」とある。この「地域の実態や保護者の要請により、教育課程にかかる教育時間の終了後に希望する者を対象に行う教育活動」が預かり保育である。

預かり保育の研究

預かり保育は、現行の幼稚園教育要領によって初めて公的な制度として実施されるようになったこともあり、現要領の施行を受けて、様々な調査研究が行われるようになった(清水, 2002)。これらの研究は、その用いられている方法から、大きく2つに分けることができる。その一つは、保育者や園長に預かり保育についてたずねるという方法を用いた研究である(大阪府私立幼稚園連盟教育研究所, 2000; 横浜市教育委員会預かり保育推進委員会, 2000, 2001など)。例えば、大阪府私立幼稚園連盟教育研究所(2000)は大阪府下の私立幼稚園約150園、横浜市教育委員会預かり保育推進委員会(2000, 2001)は横浜市内の全幼稚園に調査を実施し、①利用理由等利用の状況、②預かり保育中の子どもの様子、③預かり保育の方法などの点から調べている。これらの研究は地域の実態を調べたり、保護者のニーズをとらえ、望ましい預かり保育の方法を調べるのに不可欠な研究である。

もう一つは、保護者に預かり保育についてたずねるという方法を用いた研究である(藤澤, 2001; 大阪府私立幼稚園連盟教育研究所, 2000; 清水, 2002; 清水ら, 2001; 横浜市教育委員会預かり保育推進委員会, 2000, 2001など)。例えば、藤澤(2001)は八千代市(千葉県)内の私立幼稚園七園における預かり保育の実態を先の3つの観点から調べており、清水ら(2001)と清水(2002)は調査対象を1園に限定し、①利用理由、②預かり保育を利用した日の帰宅後の様子、③利用理由や帰宅後の様子と調査時期の関係について調べている。これらの研究は、園が実施す

る預かり保育の改善につながるという点で、今後、いずれの園や関係園でも実施が望まれるであろう。

従来の2つの研究方法の限界

ところで、これらの研究方法は、幼稚園教育要領に書かれた①適切な指導体制を整えること、②第1章に示す幼稚園教育の基本及び目標を踏まえること、③教育課程に基づく活動との関連、幼児の心身の負担、家庭との緊密な連携などに配慮すること、という3つの条件を満たすためには、必要不可欠である。しかしながら、これらの研究方法は、預かり保育が教育活動として子どもにも及ぼす影響をとらえることを目的とすると、次の点で限界があると考えられる。すなわち、どちらの研究方法も預かり保育中の子どもの真の姿を反映しているかどうかは疑問だという限界である。

保育者や園長に預かり保育についてたずねるという方法では、保育者や園長に自分たちの実践を振り返ってもらう。しかしながら保育者や園長は、特定の子どもに常に目を向けていることはできない。すなわち、教育課程にかかる教育時間内に行う保育（以下、通常保育）中にはA児、預かり保育中にはB児に注意を向けざるを得ないことがある。そのため、全体としての変化をとらえることはできるが、個々の変化をとらえることは困難である。

保護者に預かり保育についてたずねるという方法では、預かり保育を利用する理由や利用日の登園前や帰宅後の子どもの様子を保護者に尋ねる。しかしながら、保護者は実際の預かり保育中の子どもの様子を見ているわけではない。そのため保育中の子どもに焦点を当ててその様子をたずねることはできない。さらに保護者は、たとえ無記名であっても園が実施する調査に対して、保育の不備を指摘するような応答はしにくいと考えられる。そのためこの方法でも預かり保育中の子どもの真の姿を測定することは困難である。

本研究の目的

本研究は、預かり保育中の子どもの真の姿を直接とらえる試みである。

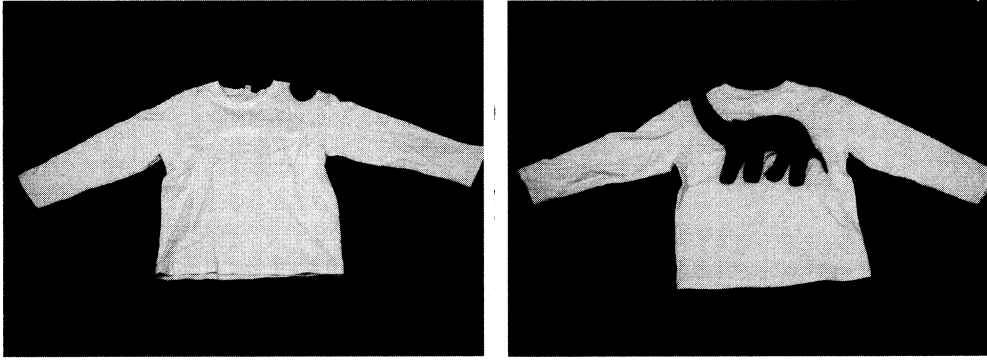
保育中の子どもの真の姿をとらえる方法としては、AV機器を用いて記録するという方法が考えられる。この方法で容易に思い浮かぶのは、VTRを用いることであろう。VTRでは、映像と音声の両面から、子どもの姿を記録できる。この記録方法には、次の2つの手続きがある。その一つは、幼稚園の多くの場所にVTRを設置し、特定の子どもを追いかけるという手続きである。ただしこの方法は、VTRをどれだけ多く準備したとしても、画面の周辺にしか子どもが映らなかつたり、子どもの背中だけを撮ってしまうことがあり、子どもの様子をいつも正確につかめるとは限らない。もう一つは、VTR撮影者を設けて、特定の子どもを一日中VTRで追いかけるという手続きである。ただしこの方法は、その子どもにとっても、周囲の子どもにとっても、常に撮られているという緊張感があり、子どもにとって適切な環境ではないと考えられる。このようにVTRでは、映像と音声の両面から子どもをとらえることができるが、真の姿をとらえ続けられる可能性が低いと思われる。

そこで本研究では、映像と音声のうち、音声のみに注目し、子どもにマイクと録音機を身につけてもらうことで、その子どもの真の姿をとらえようとした。子どもが発する声には、その子どものさまざまな姿やメッセージが反映されている。例えば、やりとりは他者に対する働きかけ、独り言は思考の経過をさぐる一助となる。また、甘えた表現や自信のある主張は、そのときの感情を推測する手だてにもなる。本研究の目的は、3歳児と5歳児について、通常保育中と預かり保育中に子どもが発する声を分析して、2つの保育を比較することである。

方 法

参加者 O大学付属幼稚園において4月から預かり保育を利用している3歳児1名と5歳児1名を調査対象とした。いずれも男児で調査当日には3歳11か月と、5歳11か月であった。

材料 ICレコーダー (SONY ICPBP220)、マイク (SONY ECM-T145)、背中にレコーダーを入れて、肩口にマイクを出しておけるようにアップリケを縫いつけた長袖Tシャツ。なお、このTシャツの作成には高橋 (1997) を参考にした (写真1)。



前

後

写真1. 作成したTシャツ

手続き 録音器具が入った長袖Tシャツに慣れさせるために、練習日として2001年10月22日に一日中この服を着用してもらった。その後、改めて2001年10月24日に本調査を行った。練習日と本調査の日には、調査対象児が登園してきた時点で、調査者または担任がレコーダーの入ったTシャツを子どもに着用させた。その際、レコーダーは8:30から17:00まで録音できるように、あらかじめタイマーをセットしておいた。本研究に参加した子どもたちは、降園時までこのTシャツを着て園生活を送った。

なお、本調査当日の幼稚園のプログラムの概要は、以下に示すとおりであった。

- 登園後、自由遊びをする
- 9:20～朝の集いに参加する
- 9:45～誕生日会に参加する
- 10:50～自由遊びをする
- 12:00 通常保育終了 → 預かり保育の部屋に移動
- 12:25～お弁当を食べる
- 食べ終わり次第、自由遊び
- 16:00～降園準備

結果と考察

登園時間から降園準備の時間までを、5分ごとの分析単位に区切り、各場面内の発話を分析した。3歳児は9:00、5歳児は9:15に登園したので、通常保育の時間における場面数は3歳児が36、5歳児が35、預かり保育の時間における場面数は3歳児が49、5歳児が47であった (通常保育の終了時刻に若干のずれがあった)。

各場面における発話の中に、大人 (教諭や実習生)、または子どもとのやりとり、独り言が含まれているかどうかを調べ、それらが含まれていた場面数をカウントした。通常保育と預かり保育の時間中における、その場面の割合を示したものが表1である (5分間に、これらのすべてが含まれている場面もあったので、合計しても100%にはならない)。以下では、この表について、通

常保育の場面と預かり保育場を独立したものとして考えて検定を行った。

「やりとり全体」の値をみると、3歳児・5歳児ともに、通常保育より預かり保育の方がやりとりの割合が高かった。保育ごとに年齢差を調べたところ、通常保育でも預かり保育でも、あまり差はなかった。

「やりとり全体」に焦点を当てた場合、通常保育の時間帯の方が預かり保育の時間帯よりも、様々なやりとりがしやすいと予想することもできる。なぜなら、「やりとり」には相手が必要であり、その相手の数という点に注目すると、通常保育の時間帯の方が預かり保育の時間帯よりも多いため、「やりとり」がしやすいと考えられるからである。しかしながら本研究の結果は、逆に、預かり保育の時間帯の方が「やりとり」の割合が高かった。本研究の結果は、預かり保育には「やりとり」をやすくする要因が含まれているといえよう。

「大人とのやりとり」の値をみると、3歳児では通常保育と預かり保育ではあまり差はなく、これに対して、5歳児は通常保育より預かり保育のほうが大人とのやりとりの割合が高かった。保育ごとに年齢差を調べたところ、どちらの保育もあまり差はなかった。

5歳児で時間帯による差が顕著であったことは次のように考えられる。5歳児は園生活にも慣れているため、保育者に積極的に「やりとり」をしようとする。通常保育では園児が多いため、保育者が一人ひとりの子どもの働きかけに応じられず、結局、「やりとり」の機会は減少する。これに対して預かり保育では、園児が少ないため、保育者も子どもの働きかけに応じることができ、「やりとり」が成立しやすいのであろう。

「子どもとのやりとり」の値をみると、3歳児、5歳児ともに、通常保育より預かり保育のほうがやりとりの割合が高かった。保育ごとに年齢差を調べたところ、通常保育ではあまり差はな

表1. カウントされた場面数の割合 (%)

		やりとり			独り言
		全 体	大人と	子どもと	
3 歳児	通 常	83.3	38.9	58.3	61.1
	預かり	95.9	42.9	85.7	51.0
	合 計	90.6	41.2	74.1	55.3
5 歳児	通 常	88.6	31.4	71.4	40.0
	預かり	97.9	53.2	97.9	38.3
	合 計	93.9	43.9	86.6	39.0

■ 3歳児 ■ 5歳児

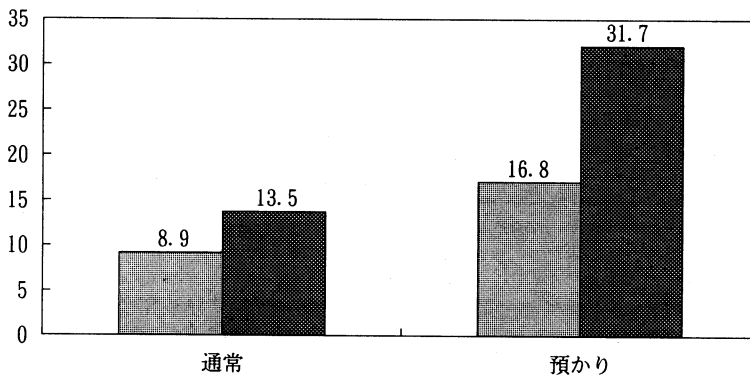


図1. 発話中の音節数の平均

かった。預かり保育では5歳児の方が3歳児よりも子どもとのやりとりが多い傾向がみられた。

独り言の値をみると、3歳児、5歳児ともに通常保育と預かり保育ではあまり差は無かった。保育ごとに年齢差を調べたところ、通常保育では、年少児の方が年長児よりも独り言が多い傾向がみられたが、預かり保育では、あまり差がなかった。

次に子どもの発話を音節ごとに区切り、その音節数を調べた。この分析の際に用いた音節の区切り方の例は次の通りとした。

例) ここに/いたって/○○。/また/あいこかよ。/まって/ほな/こっちきて。/おれ/○○くんが/いい。

図1は、通常保育と預かり保育中にみられた発話の音節数の平均を示したものである。2つの保育を独立したものとみなして、仮に、2(年齢; 3歳児, 5歳児)×2(保育; 通常, 預かり)の分散分析を行ったところ、2つの主効果と交互作用がいずれも有意であった。年齢の主効果では5歳児の方が3歳児よりも音節数が多かった。保育の主効果では預かり保育の方が通常保育よりも音節数が多かった。交互作用では年齢差は預かり保育で顕著であり、通常保育では有意ではなかった。

音節数の多さが、発話の内容が豊かさを反映すると考えるならば、先の結果は、預かり保育の時間帯の方が、子どもの発話内容が豊富であるといえる。先に述べたように、預かり保育の時間帯は、保育者が子どもの働きかけに応じられる可能性が高い。そのために、子どもは様々なことを保育者に向かって話しかけるのかもしれない。

総 合 考 察

本研究は、子どもにマイクとレコーダーを背負ってもらうという形で、保育の質を測定したととらえることができる。子どもの負担を軽減するために、さらに小さいレコーダーやマイクが開発されれば、このように子どもの直接的な反応を通して、保育サービスの質を評価できるかもしれない。

保育サービスの質については、岩立らのグループ(諏訪ら, 1997; 岩立ら, 1997; 土方ら, 1998; 岩立ら, 1998; 金田ら, 1998)や、全国保育士養成協議会(1999, 2000, 2001)が精力的な研究を行ってきている。しかし岩立らのグループの研究は、いずれもアンケートを用いており、園長・保育者や保護者の目を通して保育や子どもの姿をとらえている。全国保育士養成協議会は、第三者評価機関をめざし、書類や記録を分析することで保育サービスの質を評価しようと検討している。しかしこの分析も子どもの姿を直接調べているわけではない。そのため、本研究で開発した方法の方が、子どもの姿を客観的にとらえられている可能性は高い。

なお、本研究では子どもにマイクを背負ってもらったが、保育者にマイクを背負ってもらい、通常保育と預かり保育でかわり方が異なるかどうかを調べることもできる。もし両者が異なるのであれば、その理由についても精査する必要があるだろう。そうすることで、通常保育だけ、通常保育と預かり保育の両方、さらに、現在はあまり実施されていないが、預かり保育だけを利用する子どもにとっても、望ましい保育環境を提供できるようにしていくことができると思われる。

最後に、本研究のように保育に工学の技術を積極的に導入することは、以下に示す方向性の例のように、望ましい保育環境の構築だけでなく、保育者の負担にも貢献すると思われる。すなわち、例えば、今後、小さいレコーダーやマイクが開発されたとしても、実際の分析には発話を書き起こすという作業が含まれる。この書き起こし作業も工学の技術を導入することで、自動化するかもしれない。このような自動化は、保育者が自ら正確に記録を取る必要性を低減させるであろう。また、その自動化は、保育者が自らの保育を向上させる上でも役立てることができであろう。

引用文献

- 藤澤彩 (2001) 幼稚園における預かり保育及び 子育て支援について——母親へのアンケート調査を通して——日本保育学会第54回大会研究論文集, 460-461.
- 土方弘子・岩立志津夫・諏訪きぬ・金田利子・木下孝司・斎藤政子 1998 3歳未満児の「保育の質」に関する研究(VIII)～「3歳未満児の保育の質尺度1997(自己評価用)」に基づく調査①項目別集計～日本保育学会第51回大会研究論文集, 500-501.
- 岩立志津夫・土方弘子・諏訪きぬ・金田利子・木下孝司・斎藤政子 1998 3歳未満児の「保育の質」に関する研究(IX)——「3歳未満児の保育の質尺度1997(自己評価用)」に基づく調査②因子別集計——日本保育学会第51回大会研究論文集, 502-503.
- 岩立志津夫・諏訪きぬ・土方弘子・金田利子・斎藤政子 1997 3歳未満児の「保育の質」に関する研究(VII)——「3歳未満児の保育の質の測定と評価」に関する調査②因子分析を使った分析. 日本保育学会第50回大会研究論文集, 488-489.
- 金田利子・斎藤政子・木下孝司・岩立志津夫・諏訪きぬ・土方弘子 1998 3歳未満児の保育場面における保育方法の選択にみる「保育の質」. 日本保育学会第51回大会研究論文集, 504-505.
- 清水益治・中村純子・平化恵美子・大橋岑吉(2001) 預かり保育を考える——調査研究を通して私たちの預かり保育を振り返る——月刊保育とカリキュラム, 50, 10, 53-57.
- 清水益治(2002) 預かり保育に関する調査研究——子どもの様子に対する保育者の気づきの変化——大阪樟蔭女子大学「児童学研究」, 17, 9-17.
- 諏訪きぬ・岩立志津夫・土方弘子・金田利子・斎藤政子 1997 3歳未満児の「保育の質」に関する研究(VI)——「3歳未満児の保育の質の測定と評価」に関する調査①実際の保育評価, 単純集計——日本保育学会第50回大会研究論文集, 486-487.
- 高橋登(1997) 幼児期初期の言語発達におよぼす周囲の大人の働きかけへの影響——教師モデルから協働(collaborator)モデルへ——1996年度(財)中山隼雄科学技術文化財団研究助成金研究成果報告書
- 横浜市教育委員会預かり保育推進委員会(2000) 平成11年度文部科学省預かり保育調査研究報告書 横浜市預かり保育に関する研究
- 横浜市教育委員会預かり保育推進委員会(2001) 平成11・12年度文部科学省預かり保育調査研究最終報告書 横浜市預かり保育に関する研究
- 全国保育士養成協議会 1999 平成10年度社会福祉・医療事業団助成(子育て支援基金)による調査研究事業 保育所保育の評価基準・方法等の策定事業 研究報告書
- 全国保育士養成協議会 2000 平成11年度社会福祉・医療事業団助成(子育て支援基金)による調査研究事業 保育所保育の自主評価基準・方法等の調査研究事業 研究報告書
- 全国保育士養成協議会 2001 平成12年度社会福祉・医療事業団子育て支援基金研究事業 保育サービスの社会的評価システムの構築に関する研究 研究報告書

付 記

本研究は、平成13年度大阪樟蔭女子大学特別研究費(申請者代表;清水益治)に基づくものである。本研究の材料を作成するにあたり、大阪教育大学の高橋登先生にマイクをつけられるように工夫したTシャツをお借りしました。厚くお礼申し上げます。また、本研究のデータの収集と分析には、平成13年度大阪樟蔭女子大学学芸学部児童学科4回生市岡梓紗さん(現在、社会福祉法人三矢ゆりかご保育園[大阪府枚方市])の協力を得ました。記して感謝いたします。

A study of daycare outside hours (3)

Children's discourse during daycare regular and outside hours

Masuharu Shimizu · Haruo Kikuno · Shinkichi Ohashi

Abstract: We analyzed children's discourse in order to seek a superior type of daycare outside hours. The discourse was recorded by a microphone and an IC-recorder attached to a T-shirt. Wearing the T-shirt, a 3-year-old child and a 5-year-old child enjoyed their play at their kindergarten during regular and outside hours. Analyses of their discourse showed that they interacted with a teacher or a friend more often, and yielded more linguistic phoneme during the outside than the regular hours. These results suggested that child's discourse can be an indicator of the superior nursery teaching, and were discussed in relation to the evaluation of nursery teaching and the application of engineering or technology to nursing.

Keywords: child's discourse, daycare outside hours, evaluation of nursery teaching